

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21029

研究課題名（和文）音楽科教師の熟達プロセスの検討：経験年数の異なる教師の授業実践の比較を通して

研究課題名（英文）Examining the proficiency process of music teachers: through a comparison of the classroom practices of teachers with different years of experience

研究代表者

市川 恵 (Ichikawa, Megumi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・講師（任期付）

研究者番号：70773307

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、経験年数の異なる複数の教師の同一指導案に基づいた授業実践の比較を通して、音楽科教師の熟達化の諸相を明らかにすると同時に、そのプロセスの解明を進めてきた。熟達化研究における適応的熟達概念を援用し、複数の教師の実践を縦断的に観察、分析した結果、適応的熟達のプロセスの一側面として、一方向的なコミュニケーションによる音楽学習の成立から、子どもや音・音楽との相互作用のなかで、マルチモーダルな教室談話を柔軟に生成、運用することによって授業を展開する段階へと授業のスタイルが変容していくことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、音楽科教師は、自身の身体感覚を顧みつつ、ジェスチャー、姿勢、視線、表情などさまざまな情報を組み合わせ、子どもとの相互作用の中で、マルチモーダルな教室談話を柔軟に運用していることが明らかとなった。このような音楽科におけるコミュニケーションは、教師-子ども間だけでなく、子ども同士においても成立している可能性が大いに示唆される。教室談話におけるマルチモダリティへの着目は、音楽科における授業研究方法としてのひとつの方向性を示すものであり、今後、子どもの音楽の学びをより精緻にとらえるために重要な視点であると言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：In this study, through a comparison of classroom practices based on the same instructional plan of several teachers with different years of experience, I have been working to clarify various aspects of music teachers' proficiency and the process of proficiency. Utilizing the concept of adaptive proficiency in the study of proficiency, I have longitudinally observed and analyzed the practices of several teachers.

The results revealed that one aspect of the process of adaptive proficiency is the transformation of teaching styles from the establishment of musical learning through unidirectional communication to a stage in which lessons are developed through the flexible generation and operation of multimodal classroom discourse in interaction with children, sound and music.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽科授業研究

1. 研究開始当初の背景

人の情報処理過程を研究してきた認知心理学では、1980年代半ばから2000年頃までの間に、「熟達化研究」と呼ばれる研究分野で、スポーツや音楽、チェスなどをはじめ、さまざまな職業分野での熟達者の問題解決過程が検討されてきた。波多野、稲垣(1983)は、熟達者のもつ知識や技能の柔軟性、さらに適応性のレベルに基づき、「定型的熟達者(routine expert)」「(手際の良い熟達者)」と「適応的熟達者(adaptive expert)」という2つの区分を提示した。前者は、算盤など比較的単調な手続きを繰り返すことによって、限られた課題に習熟し、その技能の遂行の速さと正確さに際立っている熟達者であるのに対し、後者は、チェスや碁、各種のスポーツなどの競技、学術、芸術などの熟考を要するものにおいて、課題状況の変化に柔軟に対応しながら力量を発揮することが求められる熟達者である。これらの熟達化研究を援用して、教師を「適応的熟達者」として見る見方が強まっている(秋田2004)。つまり、技能を授業場面にあてはめ定型化した内容を効率よくこなすだけでなく、即興的な判断と行動が求められる教師の仕事においては、「適応的熟達者」として成長していくことが求められるのである。

では、「適応的熟達者」としての音楽科教師とはどのような姿だろうか。教育実習生や新任教師の授業は、指導案通りに授業を進めようとしてせわしない感じを受けるのに対し、教師の経験と共に授業に余裕が出てくる印象を受けることは多いだろう。本研究は、熟練教師の音楽授業における「わざ」とは一体何なのか、そしてその「わざ」とはどのように熟達していくのだろうかという問いに端を発している。佐野(1999)は、「ことば」ではない「音・音楽」を媒介とする音楽科は、他教科にもまして感覚的な側面が強調されるがために、すぐれた指導技術を教師の個性や経験、独自のカンやコツといった問題だけに還元しがちであったことを指摘している。本研究では、「わざ」という総体としてしか捉えられてこなかった熟練教師の授業実践の独自性や卓越性を、丁寧なインタビューと事例の解釈をもとに明らかにしていく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初任教師、中堅教師、熟練教師という経験年数の異なる複数の教師の同一指導案に基づいた授業実践の比較を通して、音楽科教師の熟達化の諸相を明らかにすると同時に、そのプロセスを解明することである。

3. 研究の方法

(1) 「熟達化」に関する研究動向の調査

関連分野(認知科学、認知心理学、発達心理学等)の国内外の研究動向を調査し、教師の熟達化及び熟達化モデルの構築に関する研究内容及び、研究方法を把握する。従来の音楽科教育における教師研究に欠如していた点を明らかにすると同時に、「熟達化」の概念整理を行う。

(2) 現在に至るまでの実践記録の集積と分析

研究対象である6名教師たち(初任、中堅、熟練各2名)の現在に至るまでの授業実践に関する記録(研究授業等の記録、校内研究紀要、教育雑誌等へ寄稿、研究報告書等)を可能な限り集積し、どのような実践を蓄積してきたのかを明らかにする。

(3) 経験年数の異なる6名の教師による授業実践の比較検討

応募者が事前に作成した学習指導案を6名の教師に提示し、それを基に実施された授業の参与観察及び、教師へのインタビューから、「授業実施過程」及び「授業省察」の比較を行う。さらに、各教師に本時の次の授業の学習指導案を作成してもらい、「授業デザイン」の比較を行う。

4. 研究成果

本研究では、初任教師、中堅教師、熟練教師という経験年数の異なる複数の教師の同一指導案に基づいた授業実践の比較を通して、適応的熟達という観点から音楽科教師の熟達化の諸相を明らかにすると同時に、そのプロセスの解明を進めてきた。

「熟達化」に関する研究動向の調査(平成28年度)、現在に至るまでの実践記録の集積と分析(平成28年度)、経験年数の異なる5名教師による授業実践の比較検討(平成28年度～平成30年度)という3段階を経て研究を進めてきた結果、適応的熟達のプロセスの一側面として、一方向的なコミュニケーションによる音楽学習の成立から、子どもや音・音楽との相互作用のなかで、マルチモーダルな教室談話を柔軟に生成、運用することによって授業を展開する段階へと授業のスタイルが変容していくことが明らかとなった。

具体的には、適応的な熟達プロセスを検討する際に、教室談話がいかに柔軟に運用されているかに焦点化し、教師の発話を中心にプロトコル分析をおこなった。その結果、若手教師の適応的な熟達のプロセスとして次のような姿が見られた。

若手教師は、授業経験の蓄積によって自らの授業観や教育観を徐々に形成し、自らの被教育経験や固定観念による授業スタイルから脱却して、子どもの音楽への思いや意図を引き出せるような教師と子どもの双方向的なコミュニケーションが充実した授業スタイルを志向する。それが教室談話の柔軟な運用として授業展開において顕在化し、「助言」を伴う評価言が増えたり、子ども自身に考える機会を与える「発問」が有効に用いられたり、子どもの発話や表現を価値づけ、学習展開に位置付けていく教授行為が増加する。この教室談話の柔軟な運用の背景には、

音楽をする子どもの姿に対するイメージの具体化と、子どもと音楽を共有するための言葉や教授方略のレパートリーの拡大があることも明らかとなった。また、若手教師が授業経験を蓄積するなかで、一方向的なコミュニケーションから、教室談話を柔軟に運用しながら、子どもの音楽に対する思いや意図を引き出し、音楽理解や演奏表現に結び付ける授業展開へと変化する様相もとらえた。

また、若手教師と経験年数の多い教師の発話を比較した際には、熟練教師は、感覚的で曖昧な音・音楽というものを子どもと共有するために、自身の身体感覚を顧みつつ、ジェスチャー、姿勢、視線、表情などさまざまな情報を組み合わせ、比喩表現を用いた言葉かけや範唱など教師が持ちうる限りの指導方略を用いて授業を展開していた。すなわち、熟練教師は子どもとの相互作用の中で、マルチモーダルな教室談話を柔軟に運用していることが明らかとなった。このような音楽科におけるコミュニケーションは、教師 - 子ども間だけでなく、子ども同士においても成立している可能性が大いに示唆される。教室談話におけるマルチモダリティへの着目は、音楽科における授業研究方法としてのひとつの方向性を示すものであり、今後、子どもの音楽の学びをより精緻にとらえるために重要な視点であると言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 市川恵・黒川和伸・佐野靖	4. 巻 45
2. 論文標題 二部合唱導入における指導の提案とその検証：豊かな音楽表現を目指して(教材:もみじ)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 音楽教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今川恭子・福山寛志・源健宏・市川恵・伊原小百合・志村洋子	4. 巻 48-2
2. 論文標題 人が歌い・奏でることの由来と発達を考える：「絆の音楽性」が示唆する学際的思考枠組み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 75-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 今川恭子・福山寛志・源健宏・市川恵・伊原小百合・志村洋子
2. 発表標題 人が歌い・奏でることの由来と発達を考える：「絆の音楽性」が示唆する学際的思考枠組み
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Megumi Ichikawa
2. 発表標題 Proficiency of music teachers
3. 学会等名 ASPMER 2017 in Melaka（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 市川 恵
2. 発表標題 音楽科教師の熟達プロセスの検討：同一教材を用いた授業実践の比較を通して
3. 学会等名 第53回日本教育方法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Megumi Ichikawa, Yasuko Murakami
2. 発表標題 Teaching strategy of music teachers
3. 学会等名 The 8th Pacific Rim Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日本音楽教育学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 株式会社音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

1. 著者名 スティーヴン マロック、コルウィン トレヴァーセン、根ヶ山 光一、今川 恭子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 656
3. 書名 絆の音楽性	

1. 著者名 今川恭子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 株式会社音楽之友社	5. 総ページ数 328
3. 書名 わたしたちに音楽がある理由	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----